

地下

アイドルの

ライブに

現れた霊の話

valencia

(サンプル)

(体験版の為途中からとなります)

桜田がときおり、行為を通し、自分以外の男の存在を意識しているときがあると、水森は気づいていた。今日のような不安を桜田が感じているとしたら、間違いなく原因は自分にある。桜田がしつこく疑う八坂との間には正真正銘仕事の上下関係しか存在しないが、水森には痴情の纏れから男の上司を暴行して辞職した過去があった。自分の過去を消すことは出来ないが、それ以上に目の前の相手を全力で愛することは出来る筈である。そうしてやりたいと心底水森は感じていた。

「そう思うなら、指以外でも出来ることがあるだろうか？」

「……煽りますね……じゃあ、してあげますよ」

そういうと桜田はぷっくりと膨らんだ水森の乳首を口に含み甘噛みしたり、強く吸い付いたりして水森を悶えさせた。

「なあ……そっただけじゃなく、もう……」

「欲張りですね……今日の水森さんはなんだか、煽情的だ……」

桜田は目の前で自分の人差し指と中指を口に含み唾液を絡ませると、それを水森の尻の後ろへ回し、ひくひくと蠢く穴へするりと差し込んだ。

「や……あ……桜田あ……」

ズチュ、ズチュ……と音を立てながら、長い指が水森の中を繰り返して抉る。ときおりその指がばらばらに不規則な動きをして水森は翻弄された。

「水森さん……感じますか？ 悦いですか？」

「ば……訊くな……」

桜田が身じろぎするたびに己の物と触れ合う勃起が、さらに嵩を増した。水森はそれへ手を伸ばし、指で触れる。

「っ……んあっ」

桜田が余裕のない声で呻き、水森は思わず手を引っ込め、相手の表情を伺った。黒目がちな瞳が苦笑しながら細められる。

「駄目ですよ、おイタは……」

「おイタって……お前なあ……」

五歳年下に、今年で三十四歳になる中年男が言われるセリフではない。再チャレンジしようとする、今度は改めて手で押し返された。

「これでもギリギリなんです。わかってください」

困ったような顔で乞われ、水森は愛撫を断念せざるを得なくなった。

「だったら……もう入れたらいいだろう」

「そういうわけにいきませんよ。水森さん、さっき俺たち確認しましたよね。

挿入を伴うセックスは一か月半ぶりなんですよ。水森さんのここ、狭くなってます。逆に俺は溜まりに溜まってるんで、入れちゃったらもう止まらないですよ。無理させたくはないんです。わかってください」

おもむろに水森がもそりと身体を動かさし、戸惑ったように桜田は動きを止める。すると。

「……かやる……わかれよ」

痩せぎみな身体をやや仰け反らせるようにして片肘を突き、もう一方の腕を胸の前で曲げ、拳で口元を隠すようにして水森が桜田をじっと見つめていた。その表

情はどこか恨めしそうで、綺麗な二重瞼を持つ目が、熱に浮かされたように潤んでいる。欲情している顔だ。

仰け反らせた隙間から、しっかりと勃起した細く形の良い水森のペニスが、震えて涙をこぼし、桜田に突きつけられていた。

桜田の目立つ喉仏が、ごくりと喉を鳴らすように上下に動いた次の瞬間。

「……っ」

「さく……うわ……」

左脚を自分の右肩へかけるようにして、水森の股間を大きく割った。

「おい、お前ちよつと……」

大胆なポーズをとらされ、水森は大いに慌てる。

「ごめんなさい。もう無理です……」

「さくら……ん……ああああっ……わ、悪いっ」

先ほどまで、長い指の動きに翻弄されていた場所へ、濡れた感触を感じたかと思うと、勃起がいきなりズズツと奥まで入って来て水森は大きな声が出た。そし

て、思わずと言った感じに己の口を片手で抑える。

その手が桜田に取られ、すぐに口元を解放された。

(中略)

「トラブルというか、……少し前、深夜に物凄く大きな音が聞こえたんですよ」

「深夜に騒音ですか……それはご迷惑おかけしました」

「ああ、そうじゃないです。……これははっきり聞こえてきたんですが、お隣さんが誰かに『来るなー』『やめろー！』って怒鳴っていて、……私、犯罪発生かと思っ、警察を呼ぼうと思っただんですが、いつまで経っても相手の声はまったく聞こえないし……何か争うような物音でもあれば、110番したんですが、そういうのもなくて。ただ、お隣さんってお休み以外、毎日夕方ごろに準備してお仕事へ出ていかれるし、私が出勤する時間ぐらいに帰ってこられて、玄関で鉢合わせるとも多かったんですよ。それがあの日以来ぱったりと消えて、生活音もまったくし

なくて……やっぱり何かあったんじゃないかと気になって。何より、あの……ちよつと異臭も強くなってきたりして」

「異臭は嫌ですよねえ……。でも、弓月さんって、芸能マネージャーか何かの不規則なお仕事じゃありませんでしたっけ？ イベントとかで出張されているだけじゃないですか？ 異臭は何か腐ってるのかなあ」

「以前はそういう仕事だったみたいですけど、ここ一年ぐらいはずっと夜間清掃のお仕事されてるみたいですよ」

「夜間清掃？」

思わず水森が口を挟むと。

「……ああ、すみません。こちら、大学時代のご友人だそうです。連絡がつかないって心配して来られたみたいで」

怪訝な顔をする中村さんへ担当者が言葉を添えた。

「……そうですか。ええ、多分夜勤の清掃業なんだと思います。胸元にオオカワクリーンサービスって書かれた作業着をいつも着られてるので」

「ええと、クリーンですか？ グリーンの見間違いじゃなくて？」
水森が思わず再確認すると。

「ええ……見間違いなんかじゃないですよ。カタカナじゃなくて英語で『OKAW
A CLEAN SERVICE』って書いてるんですから。私、これでも帰国子
女なので、英語には強いです。っていうか、あなた大学の友人か知りませんが、
初対面の私にちよつと失礼じゃないですか？」

「すみません……譲二のやつ、大学時代はいつも地球温暖化を止めたいって僕ら
に語っていたもので……だから、芸能マネージャーなんてヤクザな仕事を辞めた
ら、てつきり植物に関わる仕事をするものだとばかり思っていたんです。失礼しま
した」

「はあ……」

中村さんがあんぐりと口を開ける傍らで、瀬川と犬山が必死に笑いを堪えてい
るのも気づかず、担当者は腕を組みながらうんうんと頷いていた。

「本当に、切実な問題ですよね。僕も小さな氷にしがみつくと哀れなシロクマを見る

たびに、早くどうにかしなきゃって思わされますよ。……ちなみに、争うような声
っていつ頃のものですかねえ」

「ええと……金曜日の深夜一時頃です。寝入りばなに起こされて、気になって朝ま
で眠れなかったのでよく覚えてます」

「重ね重ねご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。……異臭もあるよう
ですし、これはちよつと事件の匂いがしますので、もう開錠しますね。中村さん、
お休みのところ本当にすみません。教えて頂いてありがとうございます」

そして担当者がマスターキーで鍵を開け、ドアを引いた瞬間、全員が大きく顔を
顰めた。

「うわ、まじ臭え……」

犬山が鼻を摘まみ、瀬川も鼻と口を掌で覆っている。

「糞っ、やべえ」

担当者が敬語を忘れて毒吐いた。踏み込んだ瞬間、中から何匹もの蠅が飛んでき
て、瀬川が短い悲鳴を上げる。

作業ズボンのポケットに差し込んでいたペンライトを点け、閉め切って薄暗い部屋の中を照らした瞬間、担当者の顔に緊張が走った。

そのとき、水森の足元を何かが転がり見下ろすと、可愛い柴犬の小物が転がっている。大勢で狭い三和土へ押し入ったせいで、誰かが落としたのかも知れないと思いい、水森は拾い上げて傍らの靴箱の上に置き、思わず息を呑んだ。そこには、印象的な美しいモザイクガラスのフレームに納められた、若い男女の写真が収まっている。

「みなさんは、これ以上入らないでください。あと、どなたか110番と119番をお願いします」

照射された白光の先で、居間と台所を仕切る欄干にロープを括りつけ、男が首を吊っていた。間延びした身体の足下には、染み付いた汚物が床で干からびており、十数匹の蠅が群がっている。